

CETの場合、その主宰者がデザイナーやディレクターや建築家といった、地元の人でもなければまちづくりを強く意識する人でもなく、アートや建築、文化といった立場からの実験的な性格が強い運動体であるので、完全に地元

に合ったイベントに作り変えていくことは難しいが、このイベントでこの地域に何か新しいものが芽吹いたのは確かだ。それを地域の活性化につなげていくためには、真に地元を巻き込み、続けていくことが重要である。

国連アジア本部設置による沖縄の可能性 —国連機関沖縄誘致推進センターの事例から

中 尾 安寿水

本論文は、現在政治家やNPO法人などが提唱している国連アジア本部沖縄設置における、沖縄の今後の可能性を考察する。

なぜアジア本部を設置する場所として沖縄が挙げられるのだろうか。それは、古くは琉球王国時代としての独立国家時代から、その後の薩摩藩の島津氏による侵略、明治政府による「琉球処分」、太平洋戦争において日本で唯一の地上戦となり、約二十万人もの被害を出した沖縄戦、そして、二十七年間に及ぶ米軍の統治という、様々な歴史の流れの中で芽生え、深く沖縄の人々の心に刻まれた平和を求める想いが、今後の世界の平和構築を担っていくであろう国連にふさわしいからであると言える。また、同じく強い平和の心をもつであろう被爆地である広島・長崎ではなく、なぜ沖縄なのかという点については、沖縄には現在でも根強く残る様々な問題があるからであると言えるだろう。沖縄県

人の平均所得は一九七二年の日本復帰後から常に最下位である。これには辺境の地であり海によって隔離された場所であるゆえに、産業が発達しなかつたことによる経済発展の遅れが見られる。また、今でも残る米軍基地により、基地で働き収入を得ている人、基地による地代で生活をしている人など、基地があるからゆえの依存経済の問題がある。よって、現在沖縄では、基地を反対する声は多いものの、基地がなくなることによって生活できなくなる人々がいることも事実である。この問題を解決する様々な政策や運動の中のひとつに、冒頭で述べた「沖縄にアジア太平洋国連本部を」という動きがある。

本論文では特にNPO法人国連機関沖縄誘致推進センターの活動に焦点を当て、団体の発起人である中谷靖氏の発言を参考にしながら、国連アジア本部の沖縄誘致の可能性について探っていく。

福都市生活における地下鉄の経験—小説を通じてみる東京の地下鉄

永 瀬 智 子

普段われわれが何気なく乗っている地下鉄であるが、その何気なさの中に不思議なことはたくさん転がっている。たとえば、電車の乗り間違えに代表される方向感覚の喪失であったり、乗換の仕方が駅環境に影響されたりなど、無意識のうちに我々が地下鉄に乗りながら経験していることは、地下鉄や地下空間特有のものによるためであると思われる。しかしこれ以上に、人間に不可思議な感覚を持たせたり、何かを想像させたりする要素がもっとあるのではないかと

と思い、それを探ることを卒業論文のテーマとした。

その上での主な分析の対象とするものは、アンケートではなく、もっと感覚的に訴えてくるものとして一冊の小説を選んだ。浅田次郎の『地下鉄（メトロ）に乗って』である。この小説では地下鉄という装置、そして地下という空間によって、登場人物が過去と現在を行ったり来たりする。現実では考えられないタイムスリップ、そしてワープであるが、作者がこのような